

平成18年度第2回日本海スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合センター
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2006年8月~12月)

(1) 来遊量 :

昨年と同水準、近年平均より少ない。

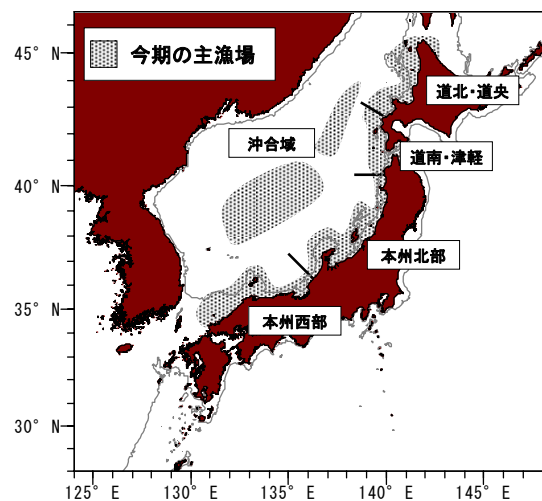
(2) 漁期・漁場 :

道北・道央および道南・津軽海域では昨年を上回るものの、近年平均を下回る。その他は近年平均並み。

(3) 魚体の大きさ :

近年平均並み。本州北部は小型。

※「近年平均」は最近5年間(2001年~2005年)の平均を示す。



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班 担当：青木、笠原、田中(博)、佐藤
〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1
電話：03-3502-8111(内線7375、7376)、直通電話：03-3501-5098、ファックス：03-3592-0759
電子メール：yuusuke_satoh@nm.maff.go.jp
独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所 業務推進部
〒951-8121 新潟市水道町1丁目5939-22
電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950、電子メール：fra-jki@ml.affrc.go.jp

なお、本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査推進委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/>)、及び日本海区水産研究所のホームページ(<http://www.jsnf.affrc.go.jp/>)に掲載されます。

参 画 機 関

北海道立中央水産試験場	鳥取県水産試験場
青森県水産総合研究センター	島根県水産技術センター
秋田県水産振興センター	山口県水産研究センター
山形県水産試験場	長崎県総合水産試験場
新潟県水産海洋研究所	社団法人 漁業情報サービスセンター
富山県水産試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
石川県水産総合センター	独立行政法人 水産総合研究センター
福井県水産試験場	北海道区水産研究所
京都府立海洋センター	東北区水産研究所
兵庫県但馬水産技術センター	日本海区水産研究所

平成18年度第2回日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2006年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り漁業（中型いか釣り、小型いか釣り）

対象魚群：主に秋季発生系群

1. 道北・道央（小型いか釣り）

(1) 来遊量：近年平均より少ない。道央は昨年を上回るが、道北は昨年より少ない

(2) 漁期・漁場：道央中心で期間中頃は低調

(3) 魚体の大きさ：道央は近年平均並み、道北は近年平均より小型

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

(1) 来遊量：近年平均より少ないが昨年より多い

(2) 漁期・漁場：期間中頃は低調

(3) 魚体の大きさ：近年平均並み

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

(1) 来遊量：近年平均より多い

(2) 漁期・漁場：新潟以北が中心

(3) 魚体の大きさ：近年平均より小さい

4. 西部日本海（小型いか釣り）

(1) 来遊量：近年平均並み

(2) 漁期・漁場：期間後半は減少

(3) 魚体の大きさ：近年平均並み

5. 沖合域（中型いか釣り）

(1) 来遊量：近年平均並み

(2) 漁期・漁場：期間後半は減少

(3) 魚体の大きさ：近年平均並み



* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（日本海中央部）

** 近年平均は最近5年間（2001年～2005年）の平均を示す

I 漁況予報

2006年の6月までの漁況の経過、日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、および冬季発生系群を主体とした太平洋での分布状況（平成18年度第1回太平洋イカ長期漁況予報）を主要な情報として今期の各海域における漁況を予測した。なお、平成18年度第1回太平洋イカ長期漁況予報では昨年を上回る来遊量となっている。

1. 道北・道央（小型いか釣り）

道北・道央海域では通常、7～8月と10～11月に漁獲量のピークがある。前半は日本海を北上した群が主対象であり、後半は太平洋からの来遊群が主な漁獲対象となる。6月の漁獲量は昨年を上回ったが、調査結果では、今年の当海域への来遊量は昨年および近年平均より少ないと判断され、特に道北海域への来遊量が少ない。したがって、今期の漁況は近年平均を下回り、道央は昨年を上回るものの、道北は昨年よりも少ないと予想される。魚体の大きさは、道央は近年平均並みであるが、道北は近年平均より小型。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

道南・津軽海域では例年7月が漁期のピークであり、年によっては10～11月にもう一つの小さなピークが出来る場合がある。調査結果や漁況の経過によると、今年の当海域への来遊量は近年平均よりも少ないが、昨年よりは多いと判断される。よって、今期の漁況は昨年を上回るものの、近年平均は下回ると予想される。魚体の大きさは近年平均並み。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

本州北部日本海域では漁期の中心は5～7月であり、8月以降にこの海域での活発な漁場形成は通常見られない。2006年5月の石川県では近年で最高の漁獲量であり、6月も新潟県を中心に漁獲量が近年平均を上回る水準であった。調査結果では、新潟県および山形県沖の魚体サイズは小型であるが、分布量は多く、今期の漁況は昨年および近年平均を上回ると予想される。漁場は新潟県～秋田県が中心であり、魚体の大きさは近年平均より小型。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

予報対象期間の西部日本海では、10月以降に産卵のために南下する来遊群が漁獲の主対象となる。6月までの漁況は近年平均を下回り低調に推移したが、調査結果では西部日本海沿岸では来遊量が少ないものの、沖合域では来遊量が近年平均並みの水準であった。よって、沖合域に分布する群が南下して漁獲対象となる10月頃は近年並みの漁況が予想される。しかし昨年同様、北海道の沖合域では分布密度が低く、漁期後半の11月以降は近年平均を下回ると予想される。魚体の大きさは近年平均並み。

5. 沖合域（中型いか釣り）

沖合域では主に大和堆付近の海域で7～9月を中心に漁場が形成される。今年の調査結果では、大和堆西方沖で近年平均並みの来遊量となっており、今期の前半は近年並みの漁況が期待される。しかし昨年同様、北海道の沖合域では分布密度が低く、漁期後半の11月以降は近年平均を下回ると予想される。魚体の大きさは近年平均並み。

1. 日本海漁場一斉調査結果の概要

1) 分布状況

2006年の日本海におけるスルメイカの分布調査結果を図1に示す。概要は下記の通りであった。

<海域別分布状況>

- (1)道北海域ではCPUE（釣機1台1時間あたりの採集個体数）が30個体前後の比較的分布密度の高い海域もあったが、平均外套背長は17~18cm台であった。
- (2)道央海域では平均外套背長が21~22cm台の大型の個体が分布していたがCPUEが10個体以下で分布密度は低かった。
- (3)津軽海峡の西では平均外套背長が19~20cm または21~22cmの個体が分布していたが、分布密度は低かった。
- (4)新潟県から秋田県沖では平均外套背長は17~18cmで小型ながらもCPUEが50前後の分布密度が高かった。
- (5)能登半島以西では山陰沖では分布密度が低かった。
- (6)大和堆以西の沖合域では平均外套背長も21~22cm台と大型であり、CPUEも50前後の調査点が多く、分布密度が高かった。

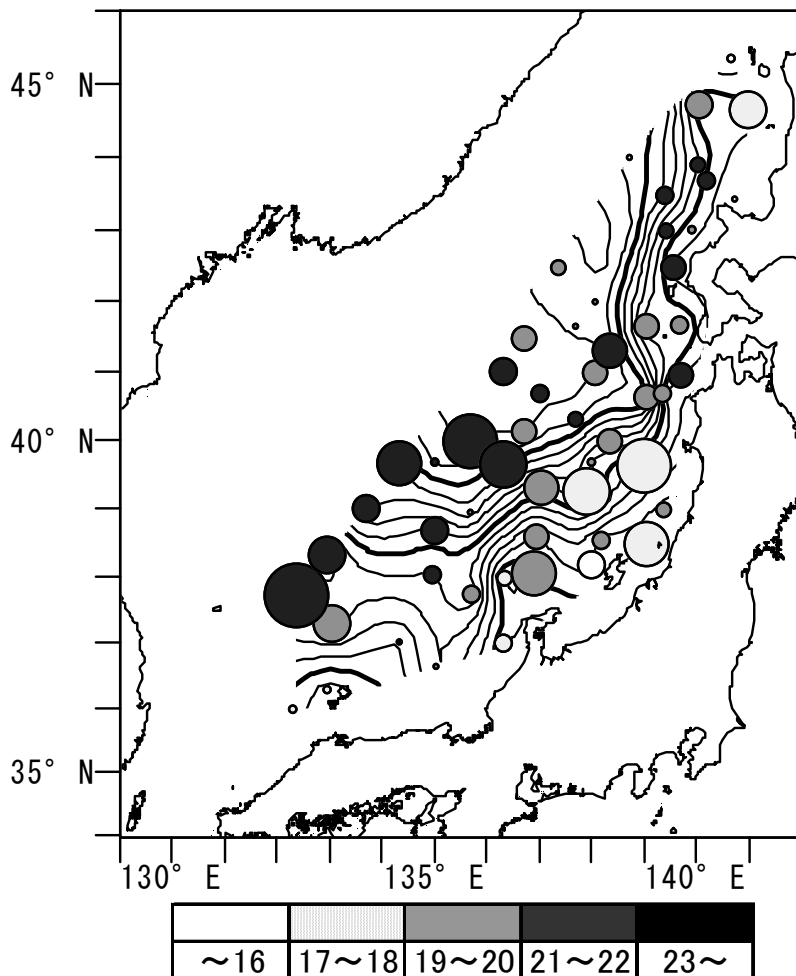


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況

●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集個体数）を示し、色は平均外套背長(cm)を示す。水深50mの水温分布も合わせて示した。

＜外套背長階級別分布状況＞

- (1) 外套背長 17～18cm の個体（主に 12 月生まれ）は、例年、調査時期に対馬暖流域を中心に広く分布し、道北海域で分布密度が高い。2006 年は新潟県～秋田県沖で分布密度が高かったが、道北海域では分布密度があまり高くなかった。
- (2) 外套背長 19～20cm の個体（主に 10～11 月生まれ）は、例年、調査時期に亜寒帯前線以南の暖水域を中心に日本海に広く分布している。2006 年も対馬暖流域を中心に広く分布していたが、分布密度が高い海域は見られなかった。
- (3) 外套背長 21～22cm および 23cm～の個体（主に 10～11 月生まれ）は、例年、調査時期に亜寒帯前線以北の冷水域を中心に分布している。2006 年は、大和堆西方を中心に比較的多く分布し、一部、道南から道央海域にまで分布域を拡大していた。

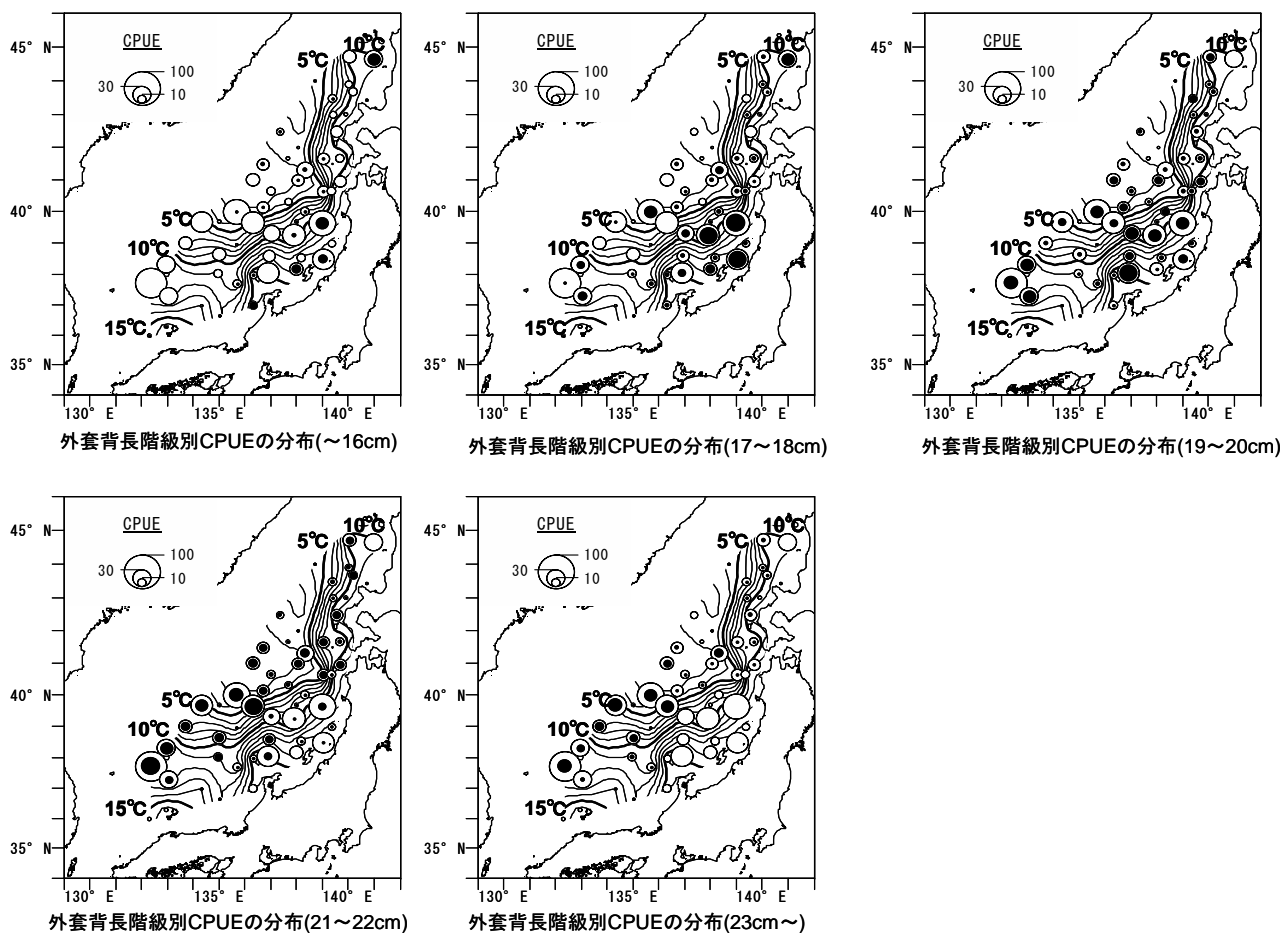


図2 外套背長階級別 CPUE。○が各調査点の CPUE、●が外套背長階級別の CPUE を示す。
水深 50m の水温分布も合わせて示した。

2) 資源水準

釣獲試験を行った全調査点の平均 CPUE（釣機 1 台 1 時間あたりの採集個体数）を日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数として用いた。資源量指数の過去 30 年間の変化傾向として、1970 年台と 1980 年代は減少傾向・中～低水準であったが、1990 年代は増加し、中～高水準になった（図 3）。なお、2000 年前後は高水準を維持していたが、近年は減少傾向にある。

2006年の資源量指数は15.80個体であり、昨年(16.24個体)の97%、近年5年平均(18.38個体)の86%であった。したがって、今年の日本海におけるスルメイカの資源量は昨年とほぼ同水準であるが、近年5年平均を下回ると判断される。なお、過去30年間の平均値(12.45)の127%であり、水準的には中～高位水準を維持している。

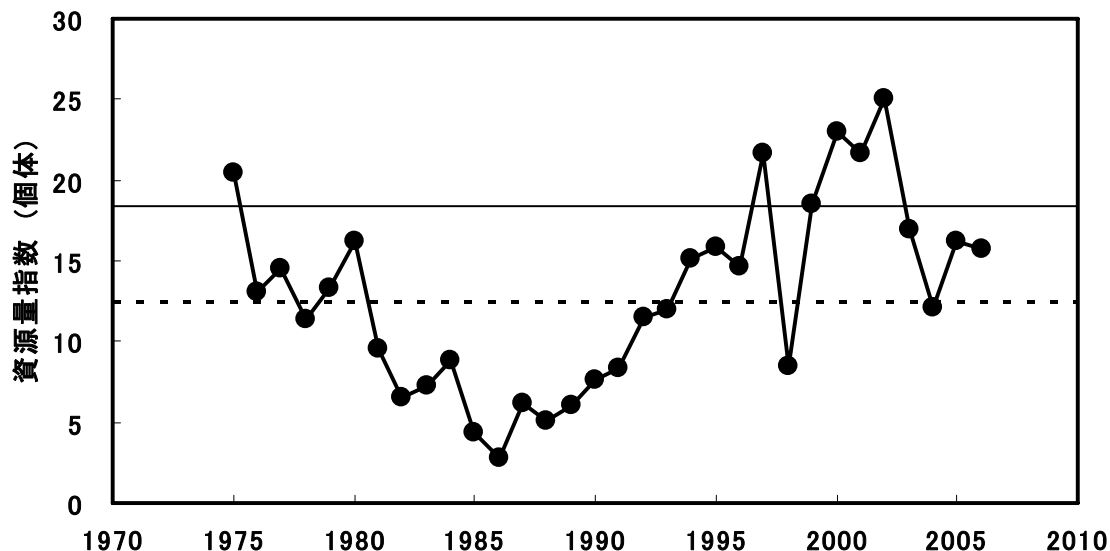


図3 スルメイカの資源量の指数の変化
細線は近年5年平均(18.38)、点線は30年平均(12.45)を示す。

3) 魚体の大きさ

各調査点の分布密度(CPUE)で重み付けした平均外套背長組成を図4に示す。2006年は外套背長21cm以上の大型の個体の分布密度は、昨年よりは低いものの、近年5年平均よりは高かった。一方、外套背長21cm未満の個体の分布密度は昨年および近年5年平均よりも低かった。

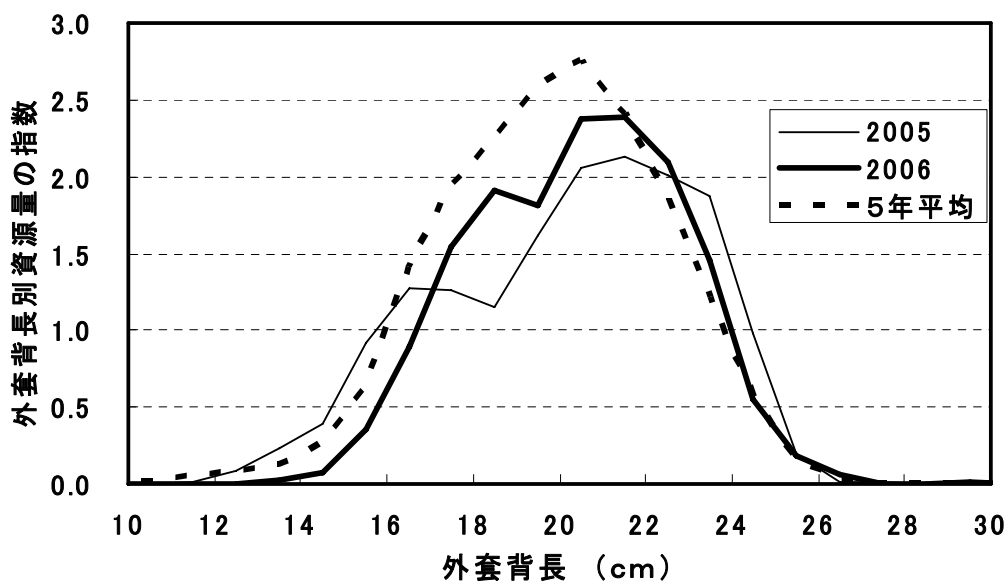


図4 日本海漁場一斉調査結果によるCPUE重み付け平均体長組成
各外套背長階級の値は釣機1台1時間あたりの平均採集個体数を示す。

2. 2006年6月（一部5月）までの漁況の経過

今年のスルメイカは5月に石川県付近に魚群が留まり、豊漁となった。6月には道南・津軽海域から道央海域にも順調に魚群が来遊し、近年平均に近い漁獲量となった。本州北部日本海では沿岸域に魚群が多く、定置網でも多く漁獲された。一方、西部日本海は6月まで低調で推移し、昨年および近年平均を下回る状況が続いている。海域ごとの要約は図4および下記の通りである。

- (1) 道央および道南・津軽海域では、6月の漁獲量が近年5年平均よりもやや低いものの、昨年を上回った。
- (2) 本州北部日本海では、5月に石川県で大量に漁獲されたことにより、昨年および近年5年平均を上回った。6月も新潟県・富山県では昨年および近年5年平均を上回った。
- (3) 西部日本海は昨年豊漁であった4月の漁獲量が近年平均を下回り、その後も近年平均を下回る漁獲量で推移している。

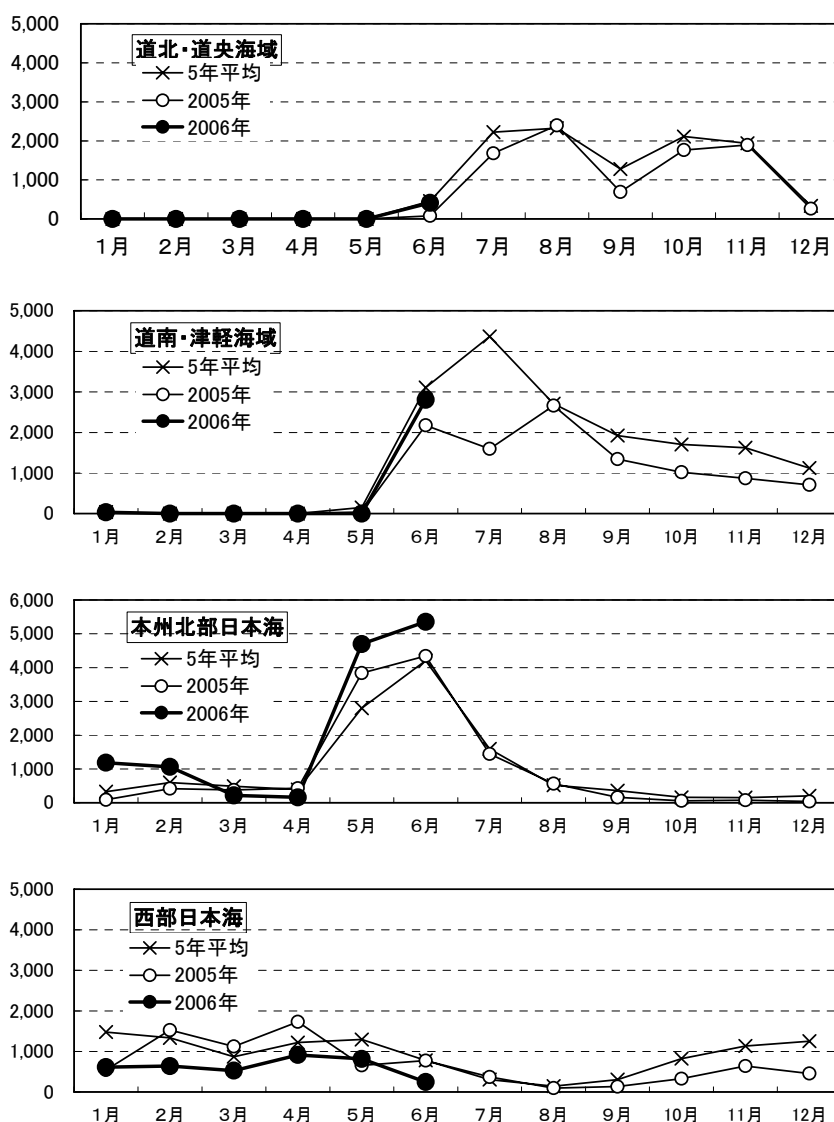


図4 日本海各海域の生鮮スルメイカの漁獲量（トン）
各道府県試験研究機関資料より作成(2006年6月は一部未集計)。